

英国

派遣期間 2012年4月～2015年3月

# ロンドン日本人学校 帰国報告

～ロンドン日本人学校における英国の現地校交流と英会話学習の連携と実践等～

北海道森町立さわら小学校

教諭 山崎 誠

## I 英国の概要

### 1 はじめに

皆さんは、「英国」と聞いてどのような印象を受けるだろうか。2012年は、夏季オリンピック・パラリンピックが開催され、2015年にはラグビーワールドカップが開催された。英国は様々なスポーツが盛んである。フットボール、ゴルフ、クリケット、卓球、テニス、ラグビー、バドミントン、競馬、などの発祥地である。また、「ハリーポッター」の舞台となった国でもあり、日本人にとって、「英国」は親近感のある国の一つともいえる。日本におけるガーデニングブームやアンティークブームにしても、そのモデルとなった国は英国である。世界に名だたるシェイクスピア、ビートルズ、ニュートン、ダーウィンも英国で生まれ、ピーター・ラビット、シャーロック・ホームズなどの作品も英国で生まれた。最近では、テレビ番組にもよくロンドンが取り上げられており、歴史的に400年近く日本との関係がある英国が、身近に感じられるようになってきた。

### 2 成り立ち

英国はヨーロッパにあるが、大陸の国々とは違って、日本と同様の島国である。私たち日本人にとっては、それだけでも一種の親近感をもてるのではないだろうか。しかしながら、その国土の様子や歴史を細部にわたって比べてみると、様々な違いがある。その一端を下記に表で示す。

	面積 (千km <sup>2</sup> )	人口 (千人)	人口密度 (人/km <sup>2</sup> )	農地面積 (千ha)	農地の国土に 占める割合	森林面積 (千ha)	森林の国土に 占める割合
日本	378	127156	342	49	13%	253	67%
英国	244	61565	245	185	76%	27	11%

(2008年度国連統計など)

表のように、面積や人口などは日本の40～60%くらいだろうか。土地利用の様子からもわかるように、英国は大部分が低い土地で、特にイングランド地方ではなだらかな丘陵地帯が広がっている。スコットランド地方やウェールズ地方には山地があるが、最も高い山でも1344mしかない。耕地の多くは小麦畑や牧草地に利用されている。

ロンドンは大都市であり、住宅価格や土地価格は東京と同じように高いにもかかわらず、人々は平均して広い住宅に住んでいるようだ。それぞれの家には必ず庭があり、芝生や花々が植えられている。イングリッシュ・ガーデンという言葉で知られるように、人々は寛ぎの場である庭を、いつまでも美しく保とうと努力している。町の中にもたくさんの公園や緑地帯がある。そこには手入れの行き届いた芝生が広がり、スポーツをしたり日光浴をしたりする人々の姿が見られる。日本の都市と比べて緑が多く、そこに棲む野生のリスや小鳥の姿は、人々の生活に安らぎや潤いを与えてくれる。少し郊外に出ると、広大な牧場で牛や羊がのんびりと草を食べている風景を見ることが出来る。このように、同じ島国でありながら、生活様式や土地利用の違いから、周囲の景観は大きく異なっている。

ところで、日本では「英国」「イギリス」という言い方が一般的だが、これは日本のみで通用する言い方である。一般的には、英国を表す言葉として「U. K.」を用いる。国際郵便で表記する時も「U. K.」を用いる。

「U. K.」(連合王国)の正式名称はUnited Kingdom of Great Britain and Northern Ireland (グレート・

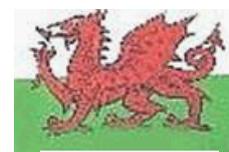
ブリテンおよび北アイルランド連合王国)で、イングランド・スコットランド・ウェールズ及び北アイルランドから構成されている。また、グレート・ブリテン (Great Britain) は、イングランド、スコットランド及びウェールズだけから構成されている。マン島、チャネル諸島は連合王国の一部ではなく、これらの島は独自の立法議会と法律制度を持ち、ほぼ自治制を取っている。しかしながら、英国政府はこれらの島の防衛と外交に責任を担っている。

英国において全ての場合にU. K. が用いられているかという点、必ずしもそうではないように思われる。イングランド人、スコットランド人、ウェールズ人、アイルランド人などと、独自の伝統や文化を背景にした民族意識が強いことも事実である。私たちは、英国のことを単一民族国家と誤解しがちだが、それはアングロサクソン→イングランド→イギリスという言葉の派生から生まれてきたと考えられる。しかし、実際のこの国は、ケルト、ローマ、ピクト、アングロサクソン、デーン、ノルマンという人々が長年の歴史の中で作り上げてきた国家であるという認識が必要である。

国家の成立と大きくかわるものの一つとして、国旗の制定がある。英国の国旗「ユニオン・フラッグ」は、艦艇のjack-staff(船首旗竿)に掲げられたことから「ユニオン・ジャック」の名で呼ばれている。ユニオン・フラッグは、一人の君主の統治下にある3カ国の紋章を象徴している。それぞれの紋章は、スコットランド(青地に聖アンドリュースの白斜め十字)、アイルランド(白地に聖パトリックの赤斜め十字)、イングランド(白地に聖ジョージの赤十字)のように、3人の守護聖人の十字を表している。



ユニオン・フラッグの形式が最終的に確定したのは、1801年のことである。アイルランドで現在、連合王国の一部になっているのは北アイルランドだけだが、この聖パトリックの十字が今も国旗に残っている。



ウェールズ

ウェールズはユニオン・フラッグに表示されていない。これは、ウェールズがすでにイングランドと一体化していたからである。ウェールズの旗は、白と緑の地に赤い龍を配したもので、15世紀に確定し、今もウェールズ全域で広く使用されている。

英国は立憲君主国であり、現在の君主はエリザベス女王である。王冠は女王に授けられるが、一般に政治の機能は、国会に対して責任を負う大臣によって果たされるので、英国は女王の名において女王の政府によって統治されていることになる。しかし、政府の重要な行為には依然として女王の関与が必要である。2012年は1952年のエリザベス二世即位から60周年にあたり、「Diamond Jubilee」(ダイヤモンド・ジュビリー)と呼ばれる式典が行われた。

### 3 文化と人々の暮らし

英国は、非常に奥深く興味深い文化を持った国である。その一端を紹介すると、劇作家のシェイクスピアを筆頭に、「不思議の国のアリス」のルイス・キャロル、詩人ワーズ・ワース、名探偵シャーロック・ホームズを生み出したコナン・ドイルなど、世界中に知られている作家による文学があげられます。また、「ハリーポッター」の作者J・K・ローリングも英国の片田舎で執筆活動をし、登場する建物、背景はまさに英国の古城や町並み、列車をモチーフとして使い、大ヒットに至ったことは有名である。他にも毎日のように公演されているミュージカル、今でも多くのファンを魅了しているビートルズの音楽など、伝統的な芸術活動は英国の誇りでもある。さらに、ゴルフ、テニス、クリケット、フットボール、ラグビーなどのスポーツが生まれたのも英国

である。これらのスポーツも、格式の高い国際大会が開かれると同時に、市民の生活の中にも取り込まれている。2015年は「ラグビーワールドカップ」が開催され、日本チームが南アフリカに歴史的勝利を収めたことは、記憶に新しいことである。

町並みに目を向けてみると、100年以上を超えて人々の生活の場となっている建物が多く見られる。もちろん近代的な建物もあるが、周囲との調和や町並みの景観を損なわないように配慮して建てられている。このように、古いものと新しいもの、伝統と革新が調和して現在の文化、さらに未来の文化を築こうとする意識がはっきりしているのが、英国の特徴ではないだろうか。

では、もう少し具体的な例をあげながら、市民生活に話を広げてみる。

### (1) 余暇の過ごし方

英国人の一般的な余暇活動は、家で過ごしたり、外出して人と会ったりすることだ。家でテレビやビデオを見たり、ラジオを聞いたりするのが最も一般的な余暇の過ごし方ようだ。音楽鑑賞もポピュラーな余暇の過ごし方で、ポップとロックが人気のある音楽と言える。大人が家庭以外で過ごす最も一般的な自由時間の過ごし方は、パブへ行くことである。その他にも、演劇や映画鑑賞も盛んである。ロンドンには1500軒以上の映画館があり、100軒以上の劇場がある。英国で最も有名な劇団「ザ・ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー」は、シェイクスピアの生地ストラットフォード・アポン・エイボンとロンドンで公演を行っている。

スポーツでは、広々とした公園を散歩したり走ったりしている人をよく見かける。男性にはゴルフ、クリケット、サッカー、スヌーカー（玉突き）などが人気であり、女性はスイミング、フィットネスクラブ、ヨガなどに通う人が多いようだ。これらの姿から健康で快適に暮らそうとする人々の意識の高さを感じる。

また、憩いの場としての庭づくりにも余念がない。それぞれが自分の気に入った庭を作ろうとして、休日には花を植えたり芝を刈ったりしている。

### (2) パブ (public house)

パブは英国の居酒屋という感じだろうか。英国に在住している外国人（もちろん日本人も）もよく利用している。パブを利用する人にとっての魅力は、何と言っても打ち解けた雰囲気だろう。初めて訪れた店で、すぐに別のグループの人たちと打ち解けた雰囲気になれる場所は他にないだろう。地元の調度品やエール（ビール）を備えた町のパブには、地元客が集まるだけでなく、ドライブで立ち寄った人たちや、ハイキングを終えたばかりのハイカー、ランチを楽しむお年寄りなどが集まってくる。都会のパブは、一般的に客層が雑多で、ビジネスマンやビジネスウーマン、レストランやナイトクラブに出かける前に立ち寄った若者たち、劇場帰りの客や友人どうしのグループなど様々だ。そこでは、楽しい会話とおいしいビールが場を盛り上げている。多くのパブの主人が言うには、やはりビールがパブの頼みの綱だそう。ビールはパブの定番な飲み物であると言われている。大形の容器（パイントグラス）で出されるので、1杯でたっぷりと会話を楽しむことができる。また、多くのパブは、スナックから食事にいたるまでの食べ物も用意されていて、他の呼び物として、ダーツやビリヤードを用意しているところもある。備え付けの液晶テレビでサッカーの試合を観戦しながらビールを飲む姿がよく見られる。

・ノースイーリングのパブにて

・フィッシュアンドチップス



### (3) 気候

(都市別月平均気温)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ロンドン	4.4	4.4	6.4	8.2	11.6	14.5	17.1	16.8	13.9	10.7	7.0	5.3
東京	6.1	6.2	9.0	15.1	17.7	23.2	25.6	28.1	24.7	19.2	13.3	6.4
稚内	-4.6	-5.7	-1.0	3.9	7.0	14.3	16.7	21.0	17.9	12.6	4.9	-2.3

英国は、緯度から見ると日本よりかなり北に位置している。そのために、非常に寒いのではないかと思われるが、暖流の北大西洋海流と偏西風の影響で、厳しい寒さは数週間程度である。降雪は年に数回程度しかなかった。また、夏も気温は上がりますが、日本と比べて蒸し暑くなることもなく快適に過ごすことができる。北海道の気候によく似ていた。夏場の降水量は、東京の約半分か1/3程度である。家や車にクーラーが必要だと思われる日はそんなにないと言ってもよい。事実、家にクーラーがついてない場合がほとんどである。気温や降水量の年較差は、日本よりはるかに小さい気候である。反面、高い山がないことも影響してか、雲の移動が激しく、一日の中で天気が目まぐるしく変わる。朝は降雨であっても、午後は却って気温が上がり、夕方には風が強くなって冷えてくるというような変化も珍しいことではない。英国の雨は、シャワーとも呼ばれ、それほど強くは降らないが、いつ天気が変わってもいいように、折りたたみの傘を持ち歩いている。

#### ○ ロンドンの季節の移り変わりの様子

4・5月	一般的に天候は不安定。一日の中で天気は目まぐるしく変わり、シャツ1枚で過ごせるかと思えば、コートや羽織りたいと思う日もある。雨が降ったり止んだりしている日が多くなる。ロン日ではウェルカムシャワーと呼んでいる。
6月	一番よい季節。天気が比較的安定し始め、爽やかな日が多くなる。様々な花が咲き始め、各地でフラワーショーが行われるのもこの時期。庭に植えられているローズが、美を競うように咲き、町を歩くだけで微かな香が漂ってくる。夜10時頃まで明るく、仕事が終わった後の時間を有効に使って生活している。
7・8月	日本では蒸し暑く過ごしにくい季節だが、ロンドンは日本の高原のような気候で、気温が上がっても木陰に入れば涼しさを感じる。町に出ると、半袖姿の人もいれば長袖のジャンパーを着ている人も見かける。例年は、比較的晴天が多く、地面も潤いて芝が枯れ始めるような時期もある。とても過ごしやすく、暑くて不快な思いをする日はめったにない。おだやかな気候が続き、北海道のようにさわやかな夏が過ごせる。
9・10月	2学期が始まる頃からすっかり秋めいてくる。部屋にヒーターを入れる日も多くなる。日も次第に短くなり、暗くて寒い冬が近づいていると感じ始める。しかし、夏が戻ってきたと思わせる陽気が続くこともある。人々は、この陽気をインディアンサマーと呼んでいる。季節は一気に冬に向けて動き出し、サマータイムが終わるのもこの時期である。
11～3月	朝出勤する頃はまだ薄暗く、子どもたちが下校する午後4時にはもう日が暮れるという日々が続く。雨が多くなり、どんよりした日が続く。氷点下にまで下がることはほとんどないが、寒くて雨が多い冬は、ロンドンに住む人にとってつらい季節かも知れない。家にはセントラルヒーティングが完備されており、トイレや浴場にもその設備がついている。各家の屋根には必ず煙突がついているが、今はそれを使う暖炉はなく、全てヒーターによる暖房になっている。煙が出なくなったおかげで、霧の町ロンドンというイメージはなくなった。(霧の発生は、煙突からの煙が原因であったと考えられている。)3月に入ると、少しずつ春の気配が感じられるようになり、スイセンやアーモンドチェリーの花が見られるようになる。しかし、年によっては、3月下旬まで、冬の気候が続くことがある。

・セミデタッチハウス (住宅)



・ラウンドアバウト (交差点)



・ピカデリーサーカス (中心街)



(4) 住宅の種類

- Detached house.....一戸建て住宅
- Semi-Detached house ..... 1棟2軒の住宅
- Town house, Terraced house・・数軒が一続きになっている住宅
- Flat..... アパート, マンション

(5) 交通規制

日本と同じ左側通行で、自動車も右ハンドルなので、運転そのものにはあまり違和感はなかった。ただ、ラウンドアバウトというロータリー式の交差点など日本と違うこともあり、交差点では注意が必要。

(6) 英国の教育制度

英国の教育制度を図に表すと下のようになる。もっとも大きな違いは、9月に新学期が始まること、5歳の子どもが小学校のreceptionに通うこと、10歳に満たない子どもの外出には必ず保護者が同伴するという慣習がある。

○下記表は、日本の学年年齢に合わせてイギリスでの学年年齢を見ます。4月～8月末迄の誕生日のお子様は左側、9月～3月末迄に誕生日のお子様は右側を確認して下さい。

※「**学年年齢**」とは、その学年で迎える年齢のことです。例)小学1年生で7歳になります。

○英国の学校は、9月1日に新年度がスタートし8月31日に終了します。

4月～8月生まれ				9月～3月生まれ			
公立(イギリス)9月～8月	呼称	日本 4月～3月	学年年齢	日本 4月～3月	呼称	公立(イギリス)9月～8月	学年年齢
3	Private Nursery(現地私立) 日系幼稚園		2				2
4	Nursery	←9月から	3			Private Nursery(現地私立) 日系幼稚園	3
5	Reception	←9月から	4	年少	9月から→	Nursery	4
6	P r i m a r y S c h o o l	←9月から	5	年少	9月から→	R e c e p t i o n	5
7		←9月から	6	年少	9月から→		6
8		←9月から	7	年少	9月から→		7
9		←9月から	8	年少	9月から→		8
10		←9月から	9	年少	9月から→		9
11		←9月から	10	年少	9月から→		10
12	S e c o n d a r y S c h o o l	←9月から	11	年少	9月から→	P r i m a r y S c h o o l	11
13		←9月から	12	年少	9月から→		12
14		←9月から	13	年少	9月から→		13
15		←9月から	14	年少	9月から→		14
16		←9月から	15	年少	9月から→		15
17	6thform	←9月から	16	年少	9月から→	S e c o n d a r y S c h o o l	16
18	u n i v e r s i t y	←9月から	17	年少	9月から→		17
19		←9月から	18	年少	9月から→		18
		←9月から	19	年少	9月から→	19	

例) 【2011年度の場合】 (渡英4/6)

- 3歳未満児は、ナーサリーに預けていません。
- 3歳女児(平成19年7月生まれ)→渡英後プライベートナーサリー、9月からレセプション入学
- 3歳男児(平成19年9月生まれ)→9月からプライベートナーサリー
- 4歳男児(平成18年7月生まれ)→渡英後レセプション、9月よりYear1
- 4歳女児(平成18年9月生まれ)→渡英後プライベートナーサリー、9月よりレセプション入学
- 5歳男児(平成17年9月生まれ)→渡英後日系幼稚園、9月よりYear1、翌4月よりロンドン日本人学校入学
- 7歳女児(平成16年4月2日生まれ)→渡英後ロンドン日本人学校入学 1年生

## II 現地教育事情調査・研究報告

### 1 調査・研究のテーマ

英国の教育改革と初等教育の現状

### 2 テーマのキーワード

英国の教育カリキュラムとICT機器活用

### 3 調査・研究の目的

ロンドンの小学校と日本の小学校の教育システムの違いを知り、英国の現状と日本の現状を比較することで今後の日本の教育へ生かせるものを探究しようと考えたからである。英国の就学前教育としては、3歳から5歳までを対象にしたNursery（幼稚園）がある。2歳から13歳を対象にした私立校では、Nursery, Pre-Prep, Middle School, Upper Schoolを併設しているところもある。このことに興味をもち、現地校に出向き調査することとした。



・West Acton Primary School

### 4 調査・研究の結果（概要）

#### (1) テーマ設定の理由

文部科学省は2013年10月、「外国語活動」として実施している小学校英語の開始時期を現在の5年生から3年生に前倒し、5年生からは教科に格上げする検討を始めた。早い時期から基礎的な英語力を身につけさせ、世界で活躍する人材を育成するのが狙いである。2020年度までの実施を目指し、中央教育審議会での協議が始まる。このように日本においても、英国と同様に教育改革の必要性が認識されている。日本の教育と英国の教育事情を比較することで、日本の教育制度の中で工夫できる点を英国の「教育改革」から模索していく。特に幼稚園と小学校低学年の連携に視点をあてて、調査・研究を進めていきたいと考えた。

#### (2) 英国の教育改革と義務教育

英国の教育改革の背景には、国際的な競争環境の激化と児童生徒の学力低下があげられる。そこで、国民の教育水準の向上、国際競争に耐え得る国民の育成を目標に1988年の「教育改革」が行われた。改革内容は、①全国共通のカリキュラム（ナショナル・カリキュラム）と統一学力テストの導入②統一学力テスト結果の公表と、親への学校選択権の付与③3-4歳児の就園率の引き上げ④30人学級の実現（小学校1-2学年における学級規模の上限を30人とする）⑤職業教育の充実⑥学校査察機関の設置等がある。以降のナショナル・カリキュラムの定めるところでは、義務教育は5歳から16歳まで。この間の必須科目（Core Subjects）として、英語、算数、理科の3教科がある。その他の選択7科目（Foundation Subjects）としてテクノロジー、歴史、地理、音楽、美術、体育、現代国語（外国語は中等学校のみ）があげられている。

義務教育期間（11年間）を四つのキー・ステージ（カギとなる段階＝小学校で二段階、中学校で二段階）に分け、ステージ毎に科目別の「学習内容」を定めると共に、生徒が到達すべき水準を設定した。

ナショナル・テスト「Standard Assessment Test」略してSATsは、学校がナショナル・カリキュラムを効果的に教え、生徒が規定水準に達しているかどうかを見るために行われる統一学力テストである。それぞれのキー・ステージの終了時に行われるこのテストで、そのキー・ステージの習熟度を計るものである。

英国では、4歳から11歳を対象にした共学のPrimary School（公立小学校）がある。Primary Schoolは、5歳の9月に入学するが、その前にレセプションという準備の段階がある。学年区分は、「Year1」、「Year2」と呼ばれ、「1年目」「2年目」という具合に、「Year6」までPrimary Schoolとなっていて、11歳を迎えた年の7月に卒業する。キー・ステージ1では、Reception～Year2の子どもたちが対象に学んでいる。

キー・ステージ1のテスト科目は「英語・算数」の2科目、キー・ステージ2以降は「英語・算数・理科」の3科目あり、その結果はLevelで示され、Year2ではLevel2、Year6ではLevel4以上が合格とされている。この合格点に何%の児童が到達したかが学校毎にデータ化される。テストの結果は、公表されて親に学校選択のための情報として与えられ、学校評価に直結してくるものである。

## 5 就学前教育と小学校算数科カリキュラム

就学前教育としては、3歳から5歳までを対象にしたNursery（幼稚園）がある。

2歳から13歳を対象にした私立校では、Nursery, Pre-Prep, Middle School, Upper Schoolを併設しているところもある。

日本のような独立した幼稚園もあるが、小学校に幼稚部が併設されている（Nursery classes within primary schools）ことが多い。義務教育直前の学級は（reception class）と呼ばれる。以前訪問したWest Acton Primary SchoolもWest Acton Nurseryと併設しており、Nursery, Primary Schoolと同じ敷地内で教育活動が行われていた。

3-5歳の時期における学習は、基礎段階（foundation stage）と呼ばれ、ナショナル・カリキュラムは存在しないものの、小学校以降の学習に先立つ重要な時期として2000年にはカリキュラム作成の参考のための「カリキュラムガイダンス」が教育雇用省（当時）により公表されている。ガイダンスでは、学習内容を以下の6つに整理している。

- ・ 人格、社会性、感情の発達 ・ コミュニケーション、言語、読み書き
- ・ 計算能力の発達 ・ 社会への知識と理解 ・ 身体の発達 ・ 創造性の発達

日本でいうと公立幼稚園の幼稚園指導要領に似たものだと感じ、その内容に興味を持った。

英国では1997の選挙公約が実現され、現在では就園を希望する全4歳児が無料で就学前教育を受けることができるようになった。さらに3歳児にも広げることが公約とされている。これによって、就園率は2000年の44%から2002年の78%に上昇している。この結果、最近の傾向として、私設保育所や託児所より小学校付属の幼稚園クラスが定員オーバーとなるほどの高い人気になっているようだ。

英国の算数のカリキュラムの大まかなものは以下の通りである。

- 4-5歳 Resepsion 10までの暗唱・+1と-1・円、三角、四角の特徴
- 5-6歳 Year1 20までの数・倍と半分の意味・長さ量の大小・身近な立体
- 7-8歳 Year2 100までの数・奇数偶数・2倍と $1/2$ ・cm・2と10の段・立方体
- 9-10歳 Year3 1000までの数・分数を使って数や形を分ける・繰り上がり・下がりのあるたし算・ひき算・5の段と $\times 100$ ・時間・直角・左右対称・表とグラフ

特徴としては、図形の領域が日本と比べて1~2年進度が進んでいるように思われる。しかし、日本では小2までに九九をマスターしてから分ける・分けられるという分数や割り算の学習への系統性があるが、英国ではYear5で九九が完成する。改めて日本の「九九の覚え方」の学習のすばらしさを実感する。

訪問時には、1クラス30名程度の学級編成であった。算数について「Year3」の授業を2クラス見学させてもらった。授業はTT体制による授業が行われていた。学習形態はグループの形態をとっていた。1グループ5~6名の児童で6グループ作られていた。メインの先生が授業を進め、サポートの先生（特別指導員と後に分かる）がグループにつくという場面であった。教室前面に電子黒板が設置されており、写し出された映像を見せながらの授業であった。全教室にプロジェクターが完備されていて、ICTの活用がごく普通に行われている。

英国における「教育改革」の成果は、小学校を中心に学力向上の改善が見られることがわかった。読み書き計算の基礎基本重視の授業編成や小学校低学年における30人学級の実現と多数の特別指導員を雇用してきめ細かい授業を行っている。子どもたちを4、5人の少人数グループに分けて、算数の基礎を丁寧に教える様子からは、先生達の熱意が感じられた。勉強を教わる子どもたちもすぐ側に先生がいて教えてくれる安心感からか、笑顔が多く見られた。

・教室備え付け電子黒板



・T Tによる小グループ学習



・創作物語の絵と文章をPCで作成



## 6 ICT機器の授業活用

○ 教室に備え付けの電磁黒板を活用しての授業

電子黒板を使い、時計や図形の学習を行っている。また、児童が発表する際に画面を活用して発表の様子が見られた。聞く側にとっては視覚的効果が見られ、集中して話を聞いている様子が印象的であった。

○ パソコンを操作して国語と図工の合科授業

児童一人ひとりに1台のパソコンがあたるパソコンルームにて、物語を作成する授業が行われていた。お絵かきソフトで画面上に絵を描き、文章を書き込んでいくという授業であった。出来上がった作品は、大画面で児童に紹介されていた。Year1の授業なので、日本では幼稚園年長にあたる。早期にパソコンに慣れ親しませているところに英国の情報教育の早さを目の当たりにした。

## 7 調査を終えて

訪問調査だけでは課題を全て把握・解決できたわけではないが、成果としては、英国における初等教育の概要を知ることができた。学校の現状としては、設備的・人的教育環境の手厚さを感じることができた。NurseryとPrimary Schoolが併設の利点や双方の教育活動内容と日本の幼稚園教育、小学校教育と比較分析することができた。特に、ICT機器を活用した授業が進んでいることに驚いた。日本では各市町村単位での整備の遅れを感じ、小学1年生からのパソコンやタブレット端末活用の必要性を感じた。今後、日本での幼小連携といった課題解決への探究に発展させていきたいと考えている。

## Ⅲ ロンドン日本人学校の概要

### 1 はじめに

ロンドン日本人学校の前身は、日本クラブが主催した「日本語会」が発足。児童生徒20名、教諭4名であったが、その後生徒数が増加し「補習授業校」になる。1976年に日本クラブ運営の「日本人学校有限会社」により小学部児童54名、中学部生徒25名の小中併設校として「ロンドン日本人学校」が設立された。翌1977年には小学部児童154名、中学部生徒69名の計223名に増加し、カムデンに小・中合同の校舎を移転した。1987年には現在地のウェストロンドンのイーリング区アクトンへと校舎を移転し現在に至る。現在の校舎は1900年にハーバードダッシュャーズ・スクールの女学校として建てられ、その後ローマ・カトリック系の公立、カーディナルニューマンハイスクールとして使用されていた約100年の歴史をもつ総赤レンガ造りの重厚感溢れる建物である。

・現アクトン校舎



・写生大会(タワーブリッジ)



・文化祭終了後菩提樹と校舎



児童生徒数は、一時は964名まで増加したが、現在は337名である。

本校の教育目標と教育の特色としては、①進んで学ぶ児童生徒「ロンドン在住の利点を生かし、国際性とコミュニケーション能力を高めると共に、日本への理解を深めることができる。」②強く、たくましい児童生徒「何事にも落ち着いて、粘り強くチャレンジすることができる。」③優しく助け合う児童生徒「学校に誇りをもち、明るく楽しい学校生活をおくることができる。」が挙げられる。主な特色ある教育活動として、「ロンドンタイム」(総合的な学習の時間)「現地校交流」「英会話授業」(小学部週3時間)「修学旅行」(小学部6年スコットランド)(中学部2年北ウェールズ)「自然体験教室」(小学部5年イングランド西部)「写生大会」(タワーブリッジ等)「生活科見学・社会科見学」(全学年:校外現地施設等)「中学部1年生英語サポートクラス」が挙げられる。

## 2 本校の学校教育目標と研究主題

本校では、開校以来「たくましいロン日っ子、ロン日生」という学校教育目標のもとで国際理解教育を推進してきた。また、上記特色ある教育活動にもあるように、「習熟度別の英会話授業」の実施や、英国にあるという条件を生かした「現地小中学校やフレンチ校、ジャーマン校、スパニッシュ校との交流学習活動」にも積極的に取り組んできている。こうした取組の現状を見直す中で明らかになった、「交流学习における英会話学習成果の活用不足」「英語での会話が成り立つための英会話の練習不足」等の課題をおさえ、英語教育活動への取組の改善と充実を図るために、改めて英国にある在外教育施設としての特色を十分に生かすとともに、児童生徒の実態や保護者の願いやニーズにも即した研究を目指すこととした。

研究主題としては「外国語を中心とした実践的コミュニケーション能力の育成」を設定し、現地校との交流学习活動を生かした実践的コミュニケーション能力の向上を目指し、英会話学習、現地校交流、そしてそれを結ぶ総合的な学習の時間(ロンドンタイム)の効果的な在り方を探究した。本研究の目指すところは、文部科学省が国際理科教育として定義している「主体的に行動するために必要と考えられる資質・能力の基礎を育成することを目的とした教育活動の実践」であり、これらの活動を通して、「異文化と共有できる資質や能力」「自己の確立」「コミュニケーション能力」を育むことにより、国際社会で活躍できるたくましい人材の育成である。

## 3 研究内容

### (1) 国際化対応への視点

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>① 「異文化と共生できる資質や能力」<ul style="list-style-type: none"><li>・ 異文化を理解し、尊重することができること</li><li>・ 異なる文化をもった人々とも共生しようとすることができること</li></ul></li><li>② 「自己の確立」<ul style="list-style-type: none"><li>・ 日本人としての意識をもつことができること</li></ul></li><li>③ 「コミュニケーション能力」<ul style="list-style-type: none"><li>・ 英語を聞いて話し手の意向などを理解することができること</li><li>・ 英語をもちいて自分のかんがえなどを話すことができること</li></ul></li></ul> |
|---|

### (2) 英会話学習【習得型学習】

#### ① 現地校交流で使用する英会話集の作成

英会話学習の年間指導計画に予め現地校交流に向けた準備の時間を設定し、実際に使用する英会話の習得を目指すこととする。具体的には、英会話講師とのミーティングを行い各学年の交流活動に即した表現を実際の授業の中で活用し指導する。

#### ② ICT機器の活用

現地校交流にて生かせる会話の習得を目指す英会話学習の充実のために、英会話講師に英会話フレーズを動画に撮影させてもらい、PCやタブレット端末で児童が常時教室で見て確かめられるような環境

を整えるなど、ICT機器を整備し積極的に活用する。

③ 系統性のある交流計画の作成と実践

現地校交流の素材となりうる内容を元に、各学年の内容を検討し、交流内容が系統性をもつものとなるように活動計画を整理する。

④ 各教科の学習を基にした交流活動計画の精選

活動内容は、児童生徒が教科の中で学習するものであるとともに交流相手に伝えたいと思う内容を選択する。また、交流当日に児童生徒が取り組む活動は、交流校の児童生徒と共同で行う活動を組み込み、コミュニケーションを図る必然性が出る場を意図的に設定する。

(4) 総合的な学習の時間【活用型授業】

○ 実践的コミュニケーション能力育成の時間の開発

これまでの総合的な学習の時間における現地校交流に向けての取組は、ダンスや歌の練習が主であった。そこで、総合的な学習の時間（低学年：学校の行事）を英会話学習（習得型学習）と現地校交流（探究型学習）を結び付ける実践的コミュニケーション育成の時間と位置付け、学習内容や学習活動の開発を行う。

(5) 小学部3年英会話習熟度別クラスの学習目標

A class	相手の考えを聞くと共に、自分の考えを述べ、会話を続けることができる。
B class	相手の考えを聞くと共に、自分の考えを述べ、会話を続けることができる。
C class	自分の考えを述べることができる。
D class	自分の考えを述べることができる。
E1 class	覚えた英語表現を言うことができる。
E2 class	覚えた英語表現を言うことができる。

(6) タブレット端末の活用方法

「やさしさ発見」の交流活動において、カードの代わりにタブレットを使用。福祉施設の写真をタブレット端末で見せながら、自分たちの調べた「町のやさしさ」について紹介する。

4 授業実践小学部3年生（モルシャム校来校交流）

(1) 現地校交流に向けての学習活動計画

取り扱う教科・領域	主な学習活動
総合的な学習の時間【活用型学習】 「やさしさ発見」（福祉）  「ブラインドウォーキング体験」	<ul style="list-style-type: none"> <li>町探検をして、町の中にあるバリアフリー、ユニバーサルデザインのものを探す。</li> <li>町探検で発見した「〇〇にやさしいもの」（福祉施設）やその他のバリアフリー、ユニバーサルデザインのものを選び、タブレット端末にまとめる。</li> <li>日常生活の中で、体に障がいをもつ人にとって不便なことは何か考える。</li> </ul>
総合的な学習の時間【活用型学習】 「自己紹介の練習」	<ul style="list-style-type: none"> <li>現地校交流で行う活動1について知る。</li> <li>「うそ発見ゲーム」で使うカードを作成する。</li> </ul>
英会話合同授業【習得型学習】 「方向を表す言葉」 「町のやさしさ紹介」	<ul style="list-style-type: none"> <li>ブラインドウォーキングをする時に、交流児童に伝える方向を表す言葉、及び歩く時の注意を促す言葉を知る。</li> <li>「やさしさ紹介カード」で使う基本構文や単語を知る。</li> <li>「やさしさ紹介カード」の練習をする。</li> </ul>
A組 総合的な学習の時間【活用型学習】 「英語で言ってみよう」	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループを作り、活動2と活動3を行う。</li> </ul>
B組 総合的な学習の時間【活用型学習】 「交流で使用する英語表現を練習しよう」	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループ毎に「町のやさしさ紹介」をする。</li> <li>ペアになってブラインドウォーキングをする。</li> </ul>
総合的な学習の時間【活用型学習】 「挨拶・自己紹介の練習」	<ul style="list-style-type: none"> <li>挨拶や活動1の練習をする。</li> <li>活動2・3の発表の仕方を練習する。</li> </ul>
総合的な学習の時間【活用型学習】 「英語で言ってみよう」	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動2と活動3をやってみる。</li> <li>交流の時に、さらに必要な表現を考え、出し合う。</li> </ul>

総合的な学習の時間【活用型学習】	・ 前時を振り返りながら、すべての活動のリハーサルをする。
現地校【探究型学習】 「モルシャム校との交流」	・ 「うそ発見カード」を使って自己紹介をする。 ・ 「町のやさしさ」紹介、「ブラインドウォーキング」をする。
総合的な学習の時間「交流の振り返り」	・ 現地校交流に向けての取組と、当日を振り返る。

(2) 「やさしさ発見」「ブラインドウォーキング〇×クイズ」活動時の英会話フレーズカード

現地校交流のフレーズ	
①これは（ ）です。 This is ( ) .	
②これは（ ）のためのものです。 This is for ( )	
③（ ）で見ることができます。 You can find it on ( ) at ( )	



「町のやさしさ発見」紹介活動



※「hump」とは、英国独自の道路設備で車道の上にこぶを作り、車のスピードを抑える物

①	②	③
1 hump	everyone	road
2 slope	disabled people	entrance
3 zebra crossing	pram	road
4 audio signal	blind people	road
5 wide entrance gate	pram	station
6 braille block	blind people	road
7 ticket machine	everyone	station

(3) 英会話活動フレーズ表（英会話フレーズ集一覧一部抜粋）

	せつめい（2）	
⑭	私たちは、町のやさしさについて調べました。	We have been finding out about how everyday objects are designed to make life easier for people with special needs.
⑮	今から勉強したことを紹介します。	We are going to show you what we have learned.
⑯	しょうかいしたことの中から、あとでクイズが出されます。	We are going to do a short presentation about what we have learned. Try and pay attention as we will have a quizz to see what you can remember!
⑰	がんばって勉強してください！	Good luck.
	せつめい（3）	
⑱	今から、ブラインドウォーキング体験を始めます。	We are now going to start a blind folded game.
⑲	体育館には、いくつかポイントがあります。	There are several points around the sports hall.
⑳	そのポイントでは、クイズが出さるので、クイズに答えてください。	There are questions at each point which you need to try and answer.
㉑	ポイントに行くとき、MS校の人は目かくしをします。	When you (The Moulsham students) get to a point you need to place blindfold on.
㉒	同じグループの子が、方向を教えてくれるので、聞きながら進んでください。	The other students will give you directions and you have to find your way by listening to them.
㉓	分からないことは、ロンドンの友達に聞いてください。	If there is something you don't understand, please ask our students.
㉔	もしも、クイズに正かいたら、アルファベットが一つもらえます。不正かいた時には、もらえません。	If you get the right answer, you will be given a letter (of the Alphabet)
㉕	このアルファベットを組み合わせると、ある言葉（トレジャーワード）ができます。	The letters you collect make up a word.
㉖	すべてのポイントを回ったら、みんなでなんという言葉ができる考えてください。	Once you've collected all the letters you have to work together to try and figure out what the word is.
㉗	それでは、ゲームを始めます。各グループ準備をしてください。	Now lets start the game. Is each group ready?

#### (4) 現地校交流当日の活動

##### ① 1・2校時「歓迎の言葉、活動1（自己紹介ゲーム）」

モルシャム校児童が予定通りバスで来校。体育館に誘導し「自己紹介カード」を書いてもらった。「歓迎の会」でお互いに挨拶をした後、活動1（アイスブレイキング）自己紹介ゲームをして、少しずつ打ち解けていった。

##### ② 3・4校時「活動2（町のやさしさ紹介）活動3（ブラインドウォーキング〇×クイズ）」

児童による全体説明後、各グループに分かれ、「町のやさしさ」についてタブレット端末を使用して紹介した。英会話授業で英会話講師を相手にシュミレーションしたことを生かして発表することができた。

ペアになったパートナーに目隠しをしてブラインドウォークを行った。どのペアも上手にポイントへ誘導することができていた。各ポイント（7つ）のクイズを一緒に考え、答えを導き出していた。英会話フレーズを活用してヒントを出すなど、積極的に英語でコミュニケーションをとる姿が多く見られた。

##### ③ 昼食・共同清掃活動

家庭科室にて一緒にグループを作り食事をした。ここでは、好きなスポーツや遊び、アニメやサッカー選手の話などで会話が盛り上がり、すっかり打ち解けた様子であった。その後、体育館でボール回しゲームなどを行った後、それぞれに交流校の児童と一緒に過ごした。ドッジボールやサッカー、遊具施設で楽しく遊ぶ姿見られた。

英国の児童は清掃活動を行う習慣がなく、交流校の希望と一緒に清掃も行った。モップを使った「掃き掃除」や雑巾を使った「拭き掃除」を行う児童のたちの姿を見て、現地校の教諭はみな日本の文化に感心していた。現地校にとっても、よい異文化交流となったため、他学年も計画に取り入れることとした。

##### ④ 5校時「日本の文化交流（折り紙体験）・お別れの会」

新聞紙で折り紙の「かぶと」を作成した。かぶとが完成したら、千代紙で他の作品作りにも挑戦してもらった。紙飛行機を作って飛ばしたり、鶴を折ったりした。中でも一番人気だったのが「ピョンピョンがえる」であった。モルシャム校は日本文化の学習を取り入れていることもあり、現地校の子たちはとても喜んで活動していた。最後は、別れを惜しみながらも、次回モルシャム校へ訪問する時の再会を楽しみにバスを見送る子どもたちであった。

#### <活動の様子写真>

○ 英会話合同授業 ・英会話講師相手にシュミレーション

・活動① 自己紹介ゲーム



・活動②ブラインドウォーキング



・活動③昼食（ランチタイム）



・活動④文化交流（折り紙体験）



## 5 研究の成果と課題

現地校交流における事前学習と英会話授業の連携を行い、より効果的な英会話学習を計画し展開するために、英語表現習得の時間を英会話学習の年間指導計画の中に位置づけた。小学部では交流前4時間を交流に向けた英会話学習として設定し、当日の活動場面で必要な英語表現を学ぶ時間とした。これにより、連携が計画的に実施され、英会話学習の指導をより有機的に行うことができた。さらに、定期的に行われている英会話ミーティングに学年教諭が参加し、当日の活動内容を説明したり、英会話フレーズの修正や動画の撮影協力を依頼したりすることで、必要な英語表現や活動内容について共有することができた。

さらに、現地校交流に向けた英会話学習の4時間目を学年教諭と英会話講師との共同授業と位置づけ、英会話講師を交流校の児童生徒と見立てたりハーサルを行うことで、より実践的な習得を目的として授業を展開することができた。これらのことは、英会話講師と学年団の連携が強化され、全教職員が共通の学習活動に対するイメージをもって交流への取組を行うことができ、大きな成果であったと言える。

今後の課題としては、自分の主張を述べるだけではなく、相手の話を聞き取り、お互いの考えを練り上げていくといった双方向のコミュニケーションが必要であり、実践的コミュニケーション能力のさらなる伸長を目指す上では、「聞くこと」の力を伸ばす授業内容の工夫・改善が求められる。そのためには、英語を聞く機会・英語に触れる機会を多くすることからも、ICT機器の更なる活用や週3回の英語学習の時間と現地校交流の時間をより連携していき、現地校の児童生徒と日常会話がスムーズにできるようになることが求められるだろう。今後もロンドン日本人学校が外国語を中心とした実践的コミュニケーション能力の育成を達成し、国際社会で活躍できるたくましい人材の育成に大きく寄与することを期待して成果と課題のまとめをしたい。

## 6 終わりに

グローバル化される世界の中で、日本の児童生徒は今後国際人として生きていかなければならない。それは、子どもたちの育つ地域や生活環境がどうあれ、異文化理解や国際理解は必要なものであると考える。英語はそのコミュニケーションをはかるツールでしかないが、とても重要な言語であることを自覚することができた3年間であった。「なぜ英語を勉強するのか。」と子どもたちに問う時、「友だちを作りたい。」「相手の言葉を覚えて話ができるようになりたい。」と、素直で率直な声が返ってくる。現地校交流を通して、相手校の子どもたちも同じことを考えていることを知ることができた。「世界中に友だちを作りたい。その国のことが知りたい。話がかしたい。」

そんな動機付けから始まる国際理解教育、英語教育は素敵だと思う。英国で生活して、英国の人々の優しさにとっても多く触れることができた。ドアを次に通る人のために手で押さえておいてあげること。地下鉄の階段では、ベビーカーを当たり前のように運ぶのを手伝ってくれること。子どもや高齢者にはバスの席を自然に譲っている若者たちがいること。これらの習慣・文化は日本の子どもたちにも伝えていきたいと思う。ロンドン日本人学校に赴任して、英語活動や英会話の授業との連携、現地校交流に向けての英会話講師との共同授業は、今後、日本の学校でのALTとの連携や2020年度から小学校3年生で実施される英語活動を見据えた、貴重な経験であった。これからの日本の教育活動でも役立てていきたいと考えている。

### <学校生活の様子写真>

### ○社会科見学「ウェイトローズ見学」

### 「ガナーズベリーミュージアム見学」

### ○英国現地校訪問（モルシャム校交流）（現地スーパーマーケット見学）

### （クリスマスプディング作り体験）



